委員提出資料

谷代委員提出資料

「精神障害を患っている患者さんとそのご家族の共生社会実現に向けた取り組みについて」
のための意見書

公募委員　谷代享子

各サービスの充実は、患者本人のみならず、そのご家族にとっても必要であり、予算がたてばある程度の実現は可能だと思われます。

しかし、一般社会で障害のない方々と普通の暮らしをしたいと思っている精神障害の患者さんとそのご家族の中には、精神障害者に対する社会的偏見や差別が大きな障壁となり、身をひそめての生活を余議なくされている人達もいます。公益社団法人　全国精神保健福祉連合会が発行している月刊誌「みんなねっと」にも、患者さんやそのご家族から「精神障害者への偏見と差別のない社会が早く実現してほしい」との意見が数多くありました。

殺人事件が起こり、その加害者が精神疾患者であったりすると、一層精神障害者に対する社会の偏見や差別が増すのではないかと危惧する障害者とその家族は多いと思います。相模原の障害者施設「やまゆり園」の事件からは優生思想まで取り沙汰されましたがその一方、この事件がきっかけで、「障害者をもっと理解しよう」という動きも出て来ています。その一例をここにご紹介したいと思います。

「ぬーたんがとぶ日」という絵本が京都のとある幼稚園と小学校で教材として使用されはじめています。作成したのは、同じく京都にある知的障害者が通う施設を運営している社会福祉法人で、「やまゆり園」の事件を子供たちにどう伝えていこうか模索していく中で生まれたそうです。
「ぬーたん」とは、京都府の鳥にも指定されているオオミズナギドリで、翼が大きいために地面から自力で飛び立てないため、高い場所から若しくは海面に放鳥してもらわなければ飛び立てません。ハンディキャップのある人を「ぬーたん」に投影、うまく飛べない「ぬーたん」を少年が後押しすることで飛び立つ姿を描いています。

この絵本を導入した背景には「社会の中で自分と違う人がいるのはあたりまえ（当然）で、そのあたりまえの事実を受け入れられる柔軟性を子供たちは持っている」「子供たちの心に最初にどんな印象を与えるか、それがその後の考え方や生き方にも大きく関わる」との考えがあったようです。
「ぬーたん」を障害者、少年を子供たちに置き換えて、子供たちに自分とは違う状況や状態の人々（ハンディをかかえた人々）を支えていってほしいという先生達のメッセージが伝わってきました。このお話を聞いた児童の中には、「将来はハンディキャップを抱える人を助ける仕事がしたい」と答えた児童もいたそうです。

どんな人にも命があり、そのすべてが大切なんだと伝えていく「種まき」は世代を問わず大切だと思います。うつ病、認知症、発達障害と近年になってこうした病気や障害を抱える人が増えつつある昨今、いつでも誰もが何らかの障害を患う、もしくはその家族になる可能性があり、明日は我が身です。精神障害者に対する偏見や差別をなくすためには、障害のない方の精神障害に対する知識の獲得と理解が欠かせません。

厚生労働省でも本秋から働く精神障害や発達障害の人をサポートするために「精神・発達障害者しごとサポーター」（仮称）の養成講座がスタートするそうです。講座では精神障害や発達障害の種類や特性、一緒に働く上での注意事項などを学ぶため、受講するサポーターが増えれば、障害にたいする理解がかなり広がることが期待されます。東京都には企業が集中しており、近隣県からも通勤者が多いので、是非この養成講座を各企業に広めて頂き、障害に対する知識を少しでも多くの方々に持って頂きたいと思います。精神障害とはどんなものかがわかれば、精神障害者に対する考え方や接し方が変わり、偏見や差別もなくなっていくと思います。偏見や差別がなくなれば、障害者とその家族はもっとオープンに社会で暮らせるようになりますし、支援をしたいと思ってくれる方々も増え、障害者に対して暖かい社会が病気の軽減につながるかもしれません。

精神障害者は怖くありません。患者さんはとても繊細で人一倍傷つきやすい方が多いです。偏見や差別のある社会が精神障害者の犯罪の引き金になっているかもしれません。施設や人的サービスの一層の向上と合わせて、偏見や差別のない共生社会に向けた具体的なプラン作成にも力を入れて頂きたいと切に願います。